

○精神史の時代概念の問題

(B. v. Wiese : Zur Kritik des geistesgeschichtlichen Epochenbegriffes. Deut. Vjrsch. 1933)

1) 時期概念は Teilen と Gesamtheit, Synthese と Analyse, Abstraktion と Su'stanz, Einheit と Vielheit, Struktur en と Sein-Ansich の兩面を失してはならない。歴史的範疇とは die kategoriale Vereinheitlichung des Vielen と die anschauliche Vielfältigkeit innerhalb der Kategorie の兩極の中間に位置すべきものである。——著者は斯くの如き見解を主張する。勿論之は、經驗史學者にとつては、自明平凡の論旨とも言へよう。併乍、本論説の興味は論理よりも寧ろ動機に懸つて居ると思ふ。何故に斯くの如き主張が書かれたのか。それは。

2) 1908年 Rudolf Unger 氏が、史料研究に反對して、文藝學の心理學的・美學的・歴史哲學的・倫理的把握を強調して、近代文藝學の方向を提案して以來、最近數十年間の獨逸精神史文獻界は、之に呼應して、史實研究及方法論の分野に涉つて、豊富な研究を贈つた。例へば、Oskar

Walzel・Rudolf Unger・Korb・Ernstinger・Nadler・F. J. Schneider・Knackhohn・Naumann 等々である。

著者 Wiese は「時期概念の問題」を通じて之等近代精神史家の傾向を検討しようと思ふ。即ち Wiese をして筆を執らしめた動機、その問題である。之等史家の傾向の當否、それを暗示するゝ點で本論文は何等かの役に立たう、興味の大部は此處に懸つて居よう。それ故に紹介に當つて、近代精神史の諸文獻を引用せる脚註を除いて論點の骨格のみを露さねばならなかつたのは遺憾である。以下紹介である。

3) Analyse と Synthese は相互に作用し合はねばならない、後者は、既成の部分の算術的總和でも、個別を排斥する全體でも、史實を犠牲にする抽象でもない。全體とは部分を、普遍とは特殊を、einordnen せるものである。精神史の時期概念も此處にある (Vgl. H. Gysarz)。それ故に、之は定義されるべきものではない。

4) 時期單位は當然 wissenschaftlich たるべきである。然るに往々にして、謂ふ所の時期概念は、形而上學的意

味付か、單に ein konstruktives Schema に過ぎぬ場合が多いではないか。斯かる圖式化が果して學的に嚴密な Epochenheiten たり得るものか。近代精神史が歴史形而上學の附帶現象であつてはならぬ。

5) それ故に先づ、時期範疇と形而上學的圖式的範疇との混同を避くべきである。かの Romantik 時代に關する無際限の論争* は、この混同の誤謬に起因して居る。

(* Franz Schultz, Oskar Walzel, Richard Ullmann, Helene Gothard, Sigismund v. Lempichl)。更に時期概念を實在化して Abstraktion を Sein に Konstruktions を Realitäten に Werkzeuge を Inhalten に誤解したり、曲解したりするべきでない。例へば、Romantik・Sturm und Drang・Impressionismus 等は、「史上を疫病的に瀰漫した」現象ではなく、歴史の An-sich では無く、單に精神現象把握の手段としての文學史的範疇に過ぎなかつた。然るに人は往々 Abstraktion を實體化し、進んで史上到る處に barock 的とか、gotik 的とかいふ人間の類型を發見しようとなつた。即ち、發見慾は本來無い處にでも何かを發

見した。斯くの如きは、史的事象の相關關係・發展形態・過渡的狀態を無視し、經驗史家の成果を害ふものであるが、Fritz Strich, Arthur Hübschner, Cysarz, Leopold Ziegler, Max Deuschlein の諸著が此種の缺陷を含んでゐる。

6) 以上を以つて史的時代概念の性質を規定する事が出来る。(i) Epochenkategorie は metaphysische-ontologische Kategorie ではなく、geschichtliche Kategorie である。(ii) 時期概念は begriffliches Schemata ではなく、das An-sich, der absolute Geist, das Sein der Epoche ではなく、Substanz 把握の Mittel に過ぎなからぬ。(iii) 従つて、それは Inhalt として、諸實在を無限に選擇・融合・包括し得る可能性を要する、最終的な形式化に陥つてはならない。多様の統一がなければならぬ。(iv) それ故に、絶えず、より適切な定義による補充修正の必要があるが、その方法は、勿論 Wirkur を混入するものであつてはならぬ (Vgl. Troeltsch: Historicismus)。(v) Sein-An-sich と不可分であるが故に、時期概念は年

代的制約をもつた、相對的に統一された Zeitraum である。従つて、斯かる Kategorie の他の時期への適用、例へば時代概念としての Romanik を中世の Romanik へまで適用するが如き事は許されない。(v) 歴史的範疇は Ideal-Typus ではない。理想型は純粹なる Typus としての衝動から, normativ-ästhetisch od. weltanschaulich-topologisch な Strukturen に傾き易い。時期とは、之に反して、「歴史自體の爲の史的區劃概念である。」

(v) 要之、時期概念把握の難點はその *Zweinheit* に在る、形式的概念的要素と經驗的内容的要素との均衡の難きに在る。史的範疇成立の由來は、理性の中にのみ存在するのではない、他面歴史自體の中に在る。それ故に時代概念の歴史的由來が考へ併されねばならない、此處に *vortwiegend* enschattlich な由來がある。既に史上の一時代は、それ自らの自覺・啓明・自己主張の爲にその時期の概念化を試みた。時期概念の成立はそれ故に「歴史それ自體の一行爲」「精神史上の一現象」である (S. 141)。従つて學的成立は成立過程上の一過程(最終過程)に過ぎず、幾多の過

程に先行されて居る。時期概念も精神の史的轉變を追つて移る。Romanik 概念の學的定立(最終段階)の前には、Romaniker 自身の *Selbstinterpretation* (最初の段階) がある筈である。前者が後者を無視し、生成の過程の展望と批判とを忘れてはならない (Vgl. Siegbert Elkuus)。

8) 更に、當然の事として、時代概念の學的定義が凝固せる形式を生んではならない。時期範疇の學的定立にせよ、その由來過程の *Strukturanalyse* にせよ、それ自體歴史上の一アクト、過程上的一段階に過ぎず、唯現在に關してのみ最終段階であるに過ぎない。それ故に最終價值ではない。現在は三つの時の中間である。それ故に現在が停止する筈はない。時代概念が抽象化し、形式化し、内容を放棄してはならない、相對的な統一として、常に熱心知らぬ動態 (Dynamik) であらう。

9) 斯くして、*Wiese* に依れば、*Epochenbegriff* とは、現實に即した動相、多様な單一、相對化された形式として、相互には *Antithese* をなさないものとなり、中世とルネサンス・*Klassik* と Romanik は相斥けない、相交

錯する。Katastrophe を知らぬ、Entwicklungsprozess に基く單位であると云ふことにならう。Wiese は斯く圖式化を攻撃する。然し勿論精神史は政治史ではないから、精神史に於ける時間と事實とは相對的な制約力を持つに過ぎない、精神史はその性格上、形而上學的意味付と圖式化を相對的に必要とする。それ故に Wiese の攻撃も、現代精神史の傾向の行き盡す處を豫想した上での議論であらう。云はゞ、時局的な議論だといふ事になりはすまいか。その故に論旨よりも寧ろ動機を尊重し度いのである。(武藤醇吉)

○ Wilhelm Hoffmann, Rom und die griechische Welt im 4. Jahrhundert.

(Philologus, Supplementband XVII. Heft 1)

ローマ文化の發展がエトルスキ及び希臘人の寄與によること大なるは常にいはれることである。エトルスキ的イタリキ的文化社會の成立に就いてはコルネマン、ジグワルト、ローゼンベルヒ、ライファア等が續々新研究を發表し、史料批判の上に否定されて行く古代ローマ傳承

から離れて古代ローマ史の再建につとめてゐる。右の社會を承けつゝ希臘的ローマ的文化社會が凡そ何時頃より初るかは興味ある問題である。考古學上ではローマを中心としたイタリキが、エトルスキの手を通じて既に前八世紀に、希臘的なるものに接するとされる。併しそれはエトルスキ文化が希臘的なるものを包攝してゐるといふ意味に於てである。希臘的なるものを分析除外して當時のエトルスキ文化を考へることは不可能である。考古學的に溯られるローマと希臘文化との關係は隨てローマとエトルスキ文化との交渉として理解すべきものである。ローマが直接に、希臘文化を希臘文化として接するのは何時か。前五世紀には希臘關係は未だ存在しないとはローマ史の常識である。併し資料不足の爲に、適確にこれを根據つけた者を見ない。著者は第一 Roms Politik und die Griechen に、第一、第二カルタゴ條約を分析批判して、前五世紀より四世紀前半迄とそれ以後のローマの對外的意圖に相違あるを主張してゐる。即ち前期にはローマの關心は常に直接の周圍に向けられ、後期に對外的擴大の